

私流

歴史の本のつくり方

— 編集者として考えてきたこと —

いのうえ かずお

講師 井上一夫さん

(元岩波書店取締役)

令和4年10月1日 土

第1講 13:30 ~ 15:00

「原典を編むということ — 読める史料集とは」

第2講 15:20 ~ 16:50

「歴史を読み取り伝える — 岩波新書の編集作法」

会場 上郷公民館 2階講堂

資料代 500円 ※高校生以下無料

申込み ①会場での受講(定員40名)②ご自宅等でのオンライン受講
のどちらかでご参加いただけます。
いずれも、**9月20日(火)**までにお電話(0265-53-4670)で
お申込みください。その際に受講方法等についてご案内させて
いただきます。

※新型コロナウイルス感染症の拡大状況により、変更が生じる場合があります。



飯田市歴史研究所

〒395-0803 長野県飯田市鼎下山 538
TEL 0265-53-4670 FAX 0265-21-1173
E-mail: iihrcity@city.iida.nagano.jp

私流 歴史の本の作り方

—編集者として考えてきたこと—

講義に当たっての思い（主な内容）

わたしはあるときから、学術教養出版社がめざすべきは二つに収斂されるのではないかと思うようになりました。ひとつは「残す言葉を選び抜く」であり、いまひとつは「届くかたちを編み出す」。これは濃淡の差こそあれ、すべての出版物が備えるべき二つの要素ではないかと。

たとえ人気が無くても（あるいは人気が無いからこそ）、出すべきものがあり、そのとき可能な限りわかりやすく、がんばれば読めるように工夫する努力がなされなければならない。また、いかに引く手あまたであっても（それだけ求める人が多いわけですが）、しかるべきメッセージが込められていなければならない。その緊張感が本の質を決めるのではないかと。ひそかにそう思っていました。

わたしが岩波書店に入ったのは1973年。すでに刊行中だった「日本思想大系」に配属され、以後10年にわたって携わります（校正3年編集7年）。学術教養とは何かを考えるにあたって、このときの経験がいかに貴重だったか、あとで何度も思い返すことになりました。これは「残す言葉」を編む作業であり、そのとき考えた工夫は「日本近代思想大系」につながります。

そして岩波新書では、主として日本史関係書目を企画編集し、「届くかたち」の追求が大きな課題になりました。ちなみにこのとき、それまでの新書イメージとは違う性格のものもつくっていて（永六輔『大往生』、阿久悠『書下ろし歌謡曲』、山藤章二『似顔絵』、鈴木敏夫『仕事道楽』等々）、言葉を届かせるうえでのさまざまなヒントを得ています。

本は一冊一冊が個性的なものであり、本来、一般化できるものではありません。したがってこの講義では、大きく網をかけたうえで、私なりに感じてきたことを具体例に即してお話ししていきたいと思っています。何かしらヒントになるものがあれば幸甚。

講師プロフィール

いのうえ かずお

井上 一夫さん（元岩波書店取締役）

1948年、福井県に生まれ、新潟県、富山県で育つ。1973年岩波書店に入社。文料系単行本編集などに従事し、1991年岩波新書編集部（のちの編集長）。その後、営業部へ異動。2003年から同社取締役（営業担当）となり、2013年退任。著書に「伝える人、永六輔～『大往生』の日々」（集英社、2019年）がある。

★飯田アカデミアとは、歴史学における第一線の研究者に、最新の研究をわかりやすく紹介していただくものです。

